〔大会記録〕パネルディスカッション

古都の時空

――京都で日本文学を学ぶということ――

楊　暁捷

一

椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ。

――吉田兼好（『徒然草』一三七段より）

「都恋し」。遠く七百年近く前に書き残された兼好のこの素直な表現は、京都をしばしだけ離れた人のみならず、久しぶりに京都に立ち寄り、そこには短く滞在し、あるいはまたこれらのすべてが叶えられないまま京都にただ思いを馳せる人びとにとっての、偽りない気持ちである。兼好の文章を読み返せば、都に結びつく風景というのは、椎の小枝であり、常緑高木の樫であり、どれ一つ取り上げてみても、けっして珍しく高貴なものでもなければ、あえて言えば京都のみのものでもない。だが、濡れた枝や葉っぱに反射される光を賞で、それに呼応して語りあう相手がいる空間こそ、都の都たらしめる所以であり、恋しく思わせる魅力なのである。

だが、そもそも都をめぐる思いを綴るということは、都そのものの存在を相対化する、これに比較する対象が明らかに生まれるということが前提である。そのような相対された都への眼差しは、『徒然草』のささやかな隠されたテーマとさえ読み取れる。それにおいて、兼好の思いに浮かび、かれの筆に記された都というのは、じつに多様多彩で、味わい深いものだった。そこには、視覚、聴覚などの五感を総動員して楽しむ美しい自然の中にある都もあれば（一四四段）、文化にかけては最高の舞を誇り（二二〇段）、他所からやってきた者どもを軽々しく受け入れようとしない厳しさを自慢して隠さず（一六五段）、はてには地方らしさを求めようと急ぎすぎて滑稽な失敗を演じてしまったという、文化の上位性に自惚れることへの覚めた眼差しもある（二三六

段）。見過ごせないのは、兼好にとっての都の最大の比較対象とは、まずはなによりも「東」であり、新しい時代を余儀なく感じさせる鎌倉である。その視線には、都の懐かしい伝統をいまだに大切に守っていることへの羨望もあれば（一九段）、いつの間にか常識となってしまった「頼もしい東人」への反論に心から同調する思いも見え隠れする（一四一段）。

兼好が見つめ、語った都は、かれ一流の矜持とエレガントさからにして、どれかに偏ることのない複眼的なものである。しかしながら、忘れてはならないのは、そのように捉えられた都であっても、千年を超える古都にしてみれば、ほんのわずかな一瞬にすぎない。政治も文化も一極集中からすこしずつ多元的なものへ展開しつつある兼好時代特有の社会情勢は、一つの特定の都市空間が内包するさまざまな要素を際立たせ、かつ社会制度の変化を加速させた。京都の時空は、それを包容する豊かでいて重層な伝統をさまざまな形で映し出し、そのため京都それ自体が豊穣な教科書となり、汲めども汲みきれない知識の源泉となった。

二

兼好は生粋な京都の人間だった。それのみならず、神職の家柄で育ち、六位蔵人を務め、壮年期に出家して修行に励み、歌人としても名を馳せるなど、かれの同時代においては普段の人間と比較して優にその何倍もの生き方を実践したのだと容易に想像ができる。仮に現代に置き換えてみても、兼好はきわめて恵まれた経歴の持ち主であり、かれの立ち位置を体験できるのはわずかな限られた人間にしかできないのではないだろうか。

そこで、現代において、京都に住み、京都で勉学するということは、なにを意味することだろうか。

この問いに対して、自分の個人的な経験を思い出さずにはいられない。わたしは、京都で大学院生としての学生生活を過ごした。すでに三十年以上も前のことになるが、いまでもときどき昨日のことのようにあのころの経験が記憶に入ってくる。ひと通り日本語を覚えたうえで留学生として京都にやってきて、日常も、そして学習生活も言葉のことで苦労させられた経験はあまりなく、むしろ似たような境地にいる周りの留学生に頼まれたりして、大した根拠もないのに自信ばかり身についていた妙な時期だった。その中で、ある日唐突に「京都で生活しているのに、京都訛りに染まっていないな」と指摘されて、はっと我に返った。たしかに京都で暮らしてはいるが、京都の人間とのつながりはこうも薄いものだと気付かされた。周りの同級生たちのことを見ていても、そのほとんどは学部生、ひいては大学院生になってはじめて京都に移ってきた人びとばかりである。大学というところは、いわば京都という町の一角を借りて閉鎖的に構えた城であり、全国あるいは世界から集まってきて、学問を目指すさまざまな人間の仮りの住まいだと捉えなくもなかった。憧れの京都、文化の沈殿に誇る京都に浸るという予想は、ただ自然の成り行きに任せる

のならば、簡単に幻影と化してしまうのだと、言いようのない動揺に打たれたものだった。因みに、あの不安を乗り越えようとする気持ちから、素人相手に設けられた狂言教室に通うことになった。後に人間国宝となられた茂山千五郎師から「柿山伏」を口写しで教わり、その経験はその後の自分には言葉で表現できない精神の糧となった。

京都の人間とは、はたしてはっきりした基準があるのだろうか。わたしには、すくなくともそれはいま現在京都に居住している人、ひいては生涯にかけて京都にだけ住処とした人間のみを指すものではないと思えてならない。他所からやってきた人びとを深く包容し、悠長な伝統や洗練された文化をもって感化することこそ、古都京都の魅力である。それだからこそ、京都にずっと住み続けることが叶えられない人びとにも、京都が故郷だと名乗らせる。どんなに短な期間にせよ、京都でかつて暮らしたとの経験は、やがてその人の記憶に残り、精神の拠り所となり、命の一部となる。

三

わたしは現在、英語圏で生活し、英語を用いて仕事をしている。英語は、日本の日常にもけっこうな分量の語彙が入り、たいていの人びとにとってけっして遠い存在の外国語ではない。しかしながら、それでも実際に英語を使ってみると、言葉の表現、そしてそこから見えてくる文化や発想の違いにはやはり目を見張るものがあり、けっして単純に単語を置き換えて対応できるものではないという実態を繰り返し体験している。

一例をあげて、自己紹介の場に頻繁に出会す一つのキーワードを紹介しよう。日本語でいう自分の専門のことを言う場合、いわゆる「major（専攻）」という言葉を使わない。「メジャー」とは大学の、それも学部生の勉強の分野のことを指すものであり、とても研究者が口にするものではない。その代わりに、かなりの場合、自分のことを指して特定の分野の「expert（専門家）」だと平気に、はっきりと自信をもって言う。そこで、一部の人はこれを謙虚に表現しようとして――英語を話す人びとの中にも謙虚を美徳とする人がいることを責任をもって言いたい――、これこれの「training（訓練）」を受けていたと言葉を選ぶ。正直、なかなか思いもよらない表現なのだ。いまだこの二つの言葉とも身に染まらず、どうしても避けられない場合のみ、恐る恐る後者のほうを選んで慎重に話すものである。そしてその度に、なかなかユニークな身の置き方だとしんみりと思い返されるものである。

突き詰めて言えば、自分ははたしてどのような「訓練」を受けていたのだろうか、との自問自答につながる。学生時代を京都で過ごし、最初の論文が活字になったのも京都だったから、それだけの理由で京都の学風、京都の学術伝統を身につけたと簡単に言えるのだろうか。そもそも自分の研究分野における京都の学風とは、どのようなものなのだろうか。誤解を恐れずに思い切って大

雑把に捉えてみれば、すくなくとも自分の思いに残されたのはつぎの二つのことがあげられよう。一つは、たとえどんな初心者であっても、研究のテーマやアプローチはあくまでもその人本人の責任であり、周りからも指導の教師からもなんらヒントをもらうことなく、いつもはかなりの苦闘のすえにようやくたどり着いた課題である。いまもさほど変わっていないのではないかと思うが、たとえば東京と較べて、分野ごとに横に繋がる研究会や読書会などの活動は明らかに少ない。京都では時間はあくまでゆっくりと流れ、ゆるやかな物差しのもとでみんなはそれぞれの研究にとりかかり、自分の責任で決めたアプローチを応用して各自の仮説や発見を繰り返し検証するものである。いま一つは、狭い問いに捕らわれることなく、いつも幅広く関連文献を読み漁り、周辺の資料を努めてカバーすることが期待される。その証拠に、すくなくとも自分の先輩や同級生たちは、およそ誰もが在来の研究分野に固執することを潔しとせず、積極的に、ときには身軽で鮮やかに越境している。その分、絶え間ない挑戦が許され、研究の進渉につねに緊張感が伴われ、研究者としての進化が見られるものである。

あるいはここにあげられていることは、学問を志す者にとってのきわめて常識的なものであり、どれも京都特有だと決め付けられないかもしれない。現に三十年前に直接に教わった学問の師も、年が経つにつれ、教え子への指導の方法にもかなりの変化を見せていたことを実際に見聞している。そういう意味では、学風として求めようとするものは、はなはだ個人的なものだとさえ言えよう。それが分かっていても、あえて自分個人の記憶に刻んだこの思いをここに記しておきたい。

四

学問の地として、京都はすでに国際的な名声を博し、どんな基準を持ち出していても、世界の先端を走っているという評判を得ている。ノーベル賞レベルの研究に端的に代表されたように、学問の都として温かい眼差しを向けられていることは争えない事実である。

歴史や文学をはじめとする人文学の分野となれば、たしかに他の文化圏での研究活動と単純に比較することは難しく、たとえ同じ言語を使っての同じ分野の研究においても、アプローチの多様さが研究の進化を反映する側面が否めない。そのような中で、京都で日本文学の研究に挑むということは、京都という自由な風土、豊かな資源、厳然とした伝統、そして未熟なものまで暖かく受け入れようとするという活力は、研究者を惹きつけて離さない魅力となる。これについては、とりわけ研究の課題としてなにを対象に取り上げるかということにおいて明らかに現われてくる。結論から言うと、どのような課題に取り掛かるかということは、それぞれの研究者にとってはなはだ個別な判断であり、さまざまな要素によって到達されるものだが、京都においては、どんな課

題に挑んだとしても、それに応える理想的な居場所が見つけられるものである。

わたしが経験してきた京都での暮らし、ここで研究生活の数々は、まさにここに述べてきた京都の魅力のささやかな具体例となる。はなはだ個人的なものなのだが、一つのいささか極端な風景をここに簡略にスケッチしておこう。

京都は、わたしにとって勉強の地であり、そして仕事についてからも、勤務校から研究休暇が与えられるごとに訪ねてきてはゆっくり滞在できるところである。わたしの日本の古典についての勉強は、中世文学、それも軍記物語を内容とするものから出発した。いわゆる軍記物のなかに収録された中国の故事説話をとりあげ、それらの日本の、それも中世的な展開を追い求めることは、学位論文の骨格だった。一九八九年の秋に博士号を取得して、その翌年からすぐにカナダで仕事に着くようになり、ふたたび京都に戻ったのはちょうど十年あとの一九九九年だった。カナダに渡った当初から、当時、ようやく普通の研究者の書斎に入るようになったカラー印刷の普及版絵巻のシリーズを抱えて、新たに始まった英語圏での生活にあわせて画像資料に没頭し、それがそのまま京都に戻ったときの研究課題となった。そこからさらに十一年の時間が流れ、一番最近の京都滞在は二〇一一年からの一年間だった。この間、発展のめまぐるしいデジタルという新しい技術は、毎日の仕事に深く入り込んだ。最初こそ職場での語学教室に持ち込むことから始まり、すべて手探り状態のものだったのだが、それがすこしずつ絵巻の絵や文字の解読、ひいては古典とマルチメディアとの融合にまで展開し、いろいろな局面で実感が得られた。これを受けて、京都での研究では思い切ってデジタル人文学というテーマを取り上げ、恵まれた環境の中でこの上なく知的な刺激を受けて、自分なりの新しい分野の輪郭を捉えた。

振り返ってみれば、時間の経過に伴い、自分の研究課題が大きく変化し、しかも学生時代もふくめて十年周期にいずれも京都に戻ってなんらかの結果に結びつけたものだった。このような小さな自分史は、ユニークだと言うほかはなく、多くの偶然が重なり、とても周到に計画して実現できるようなものではない。それでも、それぞれの時期において自分に新たな課題を課し、無知を恐れずに全力疾走し、ときには無謀としか言いようのない自分を受け入れ、絶えず集中した最高の環境を与えてくれた京都には、深く恩義を覚えるものである。

京都は恋しい。そして、京都との繋がりを末永く持ち続けたい。京都に感謝し、京都での生活の経験を生涯の糧とし、京都の包容力を享受しながら、これからも自分の研究生活を続けたい。

（やん・しょおじぇ　カルガリー大学教授）